

し技術の向上により標準化は可能と考える。

9 術前化学療法後の腹腔鏡下胃切除症例の検討

武者 信行・丸山 智宏・佐藤 大輔
田邊 匡・桑原 明史・坪野 俊宏
酒井 靖夫

済生会新潟第二病院外科

【背景と目的】 進行癌に対する腹腔鏡下手術の妥当性は、現在臨床試験で検証中である。その一方 Stage3B 以上の進行例に関しては、術前化学療法 (NAC) の適否も議論されている。今後、術前化学療法を導入した症例に対する腹腔鏡手術の妥当性も検証する必要がある。

【対象と方法】 2011年3月から2013年5月の間に、化学療法後に腹腔鏡下胃切除を施行した進行胃癌9例に関し、同時期に施行したcT3以上の進行胃癌症例17例と対比しつつ、その短期成績を検証する。

【結果】 9例中8例はcT4aであった。平均3(1-6)。コースの化学療法後、9例中7例は臨床的にダウンステージしたと判断し、手術 (DG: 2例, TG: 7例) が施行された。2例が術中cT4bで開腹移行となった。術後合併症を3例 (縫合不全: 1例, 肺合併症: 2例) に認めたが、在院死亡は認めず。術後在院日数中央値は9日(7-63日)であった。Grade1b以上の組織学的奏効例は8例であった。

【結語】 今後、進行胃癌症例の腹腔鏡下手術にコンセンサスが得られれば、術前化学療法でダウンステージが得られた症例にも腹腔鏡手術は適応拡大され得るものと思われる。

10 小児 Upside down stomach 型食道裂孔ヘルニアに対する腹腔鏡下修復術について

大滝 雅博・二瓶 幸栄*・鈴木 聡*
三科 武*

鶴岡市立荘内病院小児外科
同 外科*

【緒言】 Upside down stomach 型食道裂孔ヘルニア (以下 USDSHH) は、小児では稀な疾患で小児例に対する腹腔鏡下修復術の報告例は極めて少ない。今回1歳男児の USDSHH 症例に対し腹腔鏡下 Nissen 噴門形成術を施行したので報告する。

症例は1歳、男児。コーヒー残渣様嘔吐を主訴に医療機関を受診し、USDSHHと診断され当科入院。

【治療方針】 全身状態は良好であり、腹腔鏡下手術の方針とした。

【術中所見】 食道裂孔から噴門部以下の胃脱出を確認。鏡視下に修復後、横隔膜脚縫縮・Nissen 形成術を施行。

【術後経過】 術後12日目退院。退院前術後透視で、噴門形成部口側食道に軽度拡張所見を認めたが、術後1年後透視検査では改善。現在通常食を摂取し嘔気も可能。

【考察】 小児 USDSHH では短食道・His 角鈍化を認めることが多いとされる。単に横隔膜脚縫縮のみでは①術後胃食道逆流症 (以下 GERD) の発生②嘔吐症状再燃等、食道裂孔ヘルニア再発が危惧されるため、本症例では Nissen 手術を選択した。

【結語】 小児 USDSHH に対し、緩やかな Wrapping を工夫し腹腔鏡下噴門形成術を施行した。本術式は術後 GERD や食道裂孔ヘルニア再発を回避する点において有効と考えられた。